

# ビニールハウスの

## 周年利用について

天理農業改良普及所

竹 本 修

は じ め に

苺は奈良県における代表的果菜として、西日本随一の産額を誇っている。栽培型では促成から始まり、冷蔵抑制までほぼ周年生産の技術体系が確立されつつある。その主流を占めるのが半促成ハウス栽培で、収穫終りが5月下旬となり、跡作として導入すべき有利な果そさいがなく、水稻が主流をなしてきた。建設されたハウスの長期利用は、建設労力の省力化からして多年の懸念であった。

幸いにも露地型メロンの有望品種「サンライズ」が育成され、導入の結果、昨年度試作に成功し、本年度より普及段階に突入した。苺とメロンの組み合わせの結果、ハウスの周年利用体系が確立され、かつメロンは少肥栽培で肥料の残効がなく、苺の生産に支障をきたさず合性がとても良い。

### 栽培の概況

#### 1. 作付体系

一般的には、半促成ハウス苺の跡作としてのA様式で問題ないが、促成(無温処理)もしくは、株冷蔵による促成とをかみあわせたB、Cの栽培

| 輪作体系 | 1月 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9   | 10 | 11 | 12 | 備 考              |
|------|----|---|---|---|---|---|---|---|-----|----|----|----|------------------|
| A    |    |   |   |   |   |   |   |   | メロン |    |    |    | 半促成苺—夏メロン        |
| B    |    |   |   |   |   |   |   |   | メロン |    |    |    | 促成苺—春メロン         |
| C    |    |   |   |   |   |   |   |   | メロン |    |    |    | 株冷蔵促成苺—春メロン—夏メロン |

も可能である。

#### 2. 品 種

露地型メロンとして、メロン型、甜瓜型とも数多くあるが、栽培が容易で耐病性の点で、サンライズが安定しており、温室メロンに近いネットが発現するので、今後消費が高度化する時点で、大衆メロンとしての素質に期待がもてる。

#### 3. 育 苗

ハウス内において寒冷紗被覆育苗を行なう。植傷み防止のための子葉展開、本葉の米粒大時に本

圃に定植するのが望ましい。

#### 4. 定植と管理

間口 4.5~5.0mのハウスに地ばえ栽培とし、4.0~4.5mのやや蒲鉾状に畦立を行い、株間30~35cmに定植する。ハウスは両サイドを解放にして、35°C以上の高温にならないよう換気する。ウイルス病の防除のため、寒冷紗を初期トンネル状に被覆し、途中よりハウスの両サイドを覆う。本葉4枚にて摘芯を行い、2本整枝として一蔓に2カ、計1株に4カ穫りとする。着果節位は、10~11~12節に連続着果させる。

#### 5. 施 肥

苺跡作の場合10a当り珪酸苦土石灰100Kと、CDU化成40K(N16—P8—K12)とする。生育状況に応じて液肥の500~600倍液を、灌水チューブにて補肥する。

#### 6. 病 害 虫

連作の場合は、蔓割病対策として接木栽培を行なう。うどんこ病はほとんど発生しないが、アカダニとアブラ虫は早期防除が必要である。

#### 7. 収 穫

10a当り600本として約2,400カ、販売個数2,000カとして平均単価1カ250円として50万円は確実

#### 8. 経 済 性

生産費については、ハウスのビニール、コルチングビニールとも苺の残品利用でよく、100%活用できる。しいて言えば、初年度のみ寒冷紗300#

1.8巾400mハウス両サイド分程度である。労力面では、苺に比較して作期が短かく、1/4の所要力で済むのが大きな魅力である。栽培型Cのタイプでは、年粗収益10a200万円は可能である。(苺100万 メロン50万+50万)

#### 9. 今後の方向と問題点

現在、天理普及所管内を主体として、県下の苺主産地にわたり50名の栽培者があり、サンライズ研究会が結成され5haの夏メロンの生産がある。

その他2~3種類の品質も栽培され、苺~メロンの組合せは今後益々増大の傾向がある。しかし問題点としては夏作の関係上、台風災害によるハウスの倒潰の場合、致命的な障害を受ける悩みがある。この回避策として強度のハウス、もしくはガラス室による安定した施設内で、促成苺~メロン(春夏2作)の生産が近く実現しそうである。